

論文要約

死の「受容」と人間形成 —E.キューブラー＝ロスの思想再考—

青柳 路子

本論文は、エリザベス・キューブラー＝ロス (Kübler-Ross, Elisabeth.;1926-2004) の思想を再考することを通して、死の「受容」と人間形成について論じたものである。

キューブラー＝ロスは、1969年に「死にゆく過程の段階」説（以下、段階説と略）を示したことで知られている。この説は、終末期医療の黎明期であったアメリカ、シカゴ大学附属ビリングス病院で行われた「死と死にゆくこと」のセミナーで、精神科医であるロスが、2年半の期間に200人の末期患者に対して行ったインタビューから導き出された。それは致命的な病いに罹患したことを知った後の「死にゆく過程」において、患者が「否認」「怒り」「取り引き」「抑鬱」「受容」という5つの段階を経ていくことを示したものである。

本研究では、段階説を示し、死と死にゆくことについて探究したキューブラー＝ロスの思想について、段階説提唱後の思想までを含めて取り上げ、再考する。注目したのが、死の「受容」である。最終段階を「受容」とする段階説は、私たちに死を「受容」という命題をもたらした。それはキューブラー＝ロスにおいて、当初、「私」の死の「受容」であったが、彼女が段階説を一般化することで、愛する者の死の「受容」も同様の枠組みでとらえられるようになる。

「私」の消滅を意味する死も、愛する者を喪失する死も、人間は避けることができない。それらの死を「受容」することは極めて困難であるが、困難であるがゆえに、それぞれの死を「受容」しようとするプロセスには人間形成の営みがとらえられる。

本論文では、これらの2つの死の「受容」をキューブラー＝ロスがどのようにとらえ、またその死を「受容」していくプロセスにどのような人間形成の営みをみていたのかを改めて問い直す。加えて、本論文で試みるのが、キューブラー＝ロスの思想を思想的影響関係のなかに位置づけながら再考することである。ロスは段階説の提唱によって、歴史に唐突に登場した。しかし彼女は「点」としてあり、その思想形成の文脈は見えない。本研究では、「点」であったキューブラー＝ロスの思想を、思想的影響関係の「線」上に位置づけながら、これまで論じられてこなかった思想にも光をあて、主題とする死の「受容」と人間形成について考察することを目的とした。

本論文は、3部構成である。

第I部（第1・2・3章）は、段階説を中心に、キューブラー＝ロスがシカゴ大学附属ピリングス病院で取り組んだ仕事を取り上げ、その思想について検討した。

第1章では、段階説が示された *On Death and Dying* に立ち返り、段階説および最終段階「受容」がどのように述べられていたかを確認し、次に先行研究に依拠しながら段階説の問題を取り上げ、最後に段階説提唱後のロスの著作における段階説と最終段階「受容」についての論述の変化をとらえた。

段階説は、自分の死に直面したときの精神の防衛機制の働きとその変化をとらえたものである。その最終段階「受容」は、「感情がほとんど欠落した状態」とされ、希望を絶ち、闘いを放棄する「断念」とは異なるものとして述べられるものの、実際には明確な定義を欠いており、段階名称を援用してとらえることができないものであった。しかしそもそも段階説は、公表された時点で既に問題を有していた。すなわち、*On Death and Dying* には、章題に示された叙述モデルと、図式化された図式モデルという矛盾する2つの段階説モデルが示されていた。その後のロスの論述では、当初の矛盾は解消されていく一方、「受容」の段階の定義は依然として曖昧であり、さらに「断念」ではなく「あきらめ」と異なるものとして述べられるようになる。

On Death and Dying では、なぜ2つの段階説モデルが示されることになったのか。そしてキューブラー＝ロスは末期患者へのインタビューからどのように段階説を構築したのか。その問いに迫るために、第2章では、段階説が導き出されたシカゴ大学附属ピリングス病院での「死と死にゆくこと」のセミナーを取り上げ、協働者の視点から浮かび上がるロスの仕事をとらえた。

キューブラー＝ロスに依拠すれば、セミナーは彼女がはじめ、彼女にイニシアチブがあったと理解される。しかし、セミナーの協働者らによると、セミナーは、神学生のための臨床パストラル教育を目的としたものであり、ロスの、段階説に至る末期患者との仕事は、神学と精神医学の協働による臨床パストラル教育の延長上に展開されたものとしてとらえ直される。

続く第3章では、セミナーにおける段階説の形成についての探究を進めながら、キューブラー＝ロスが後に主張する段階説の一般化の問題について論じ、さらにシカゴ大学離職後の段階説に関するロスの言説から、「私」の死の「受容」と、愛する者の死の「受容」についての論述の変化を追い、本研究における論点を抽出した。

セミナーの協働者らの発言・証言に基づけば、段階説は、がんという病いへの適応をとらえた医療分野における研究の系譜に位置づけられる。他方、キューブラー＝ロスは、

シカゴ大学着任以前の障がいのある患者との仕事において、自らが段階説の理論的基礎を構築したと主張する。この主張は、末期患者の臨床から「死にゆく過程」をとらえたという段階説の理論的根幹を揺るがす。にもかかわらず、ロスが段階説を「死にゆく過程」の理論として保持しながら、喪失への適応をとらえた理論として一般化する。

段階説の一般化による影響か、後にキューブラー＝ロスが述べる「受容」は、端的な「死の受容」ではない複層的なものとなる。一方、愛する者の死の「受容」については、段階説を喪失についての理論としながらも、突然死による喪失を除いては、ロスは喪失後、すなわち死別後の死の「受容」については十分に述べていないことが確認できる。

第II部（第4・5章）は、主としてシカゴ大学を離職した後のキューブラー＝ロスの思想を取り上げ、その展開を追いつつ、彼女が死と死にゆくことの研究で最も影響を受けた精神医学者であると述べた、C.G.ユングからの影響の検討を主軸として論じた。

ロスは、ユングから影響を受けたとしながら、具体的な影響については語らなかった。そこで第4章では、ユングからロスへの思想的影響について、「死の準備」であり、また「個性化プロセスの完了としての死」といわれてきたユングの「個性化」に焦点を絞り、検討を試みた。この検討を充実させるために、キューブラー＝ロスの **unfinished business** 概念を取り上げた。これはロスが、末期患者の「死を前にした課題」として見出したものである。患者はそれぞれの「死を前にした課題」を解決・解消することによって変容したが、その変容は自分自身の死を迎える準備をもたらすものであった。つまりキューブラー＝ロスは、段階説に示されたプロセスとは異なった、「死にゆく過程」におけるもう一つの変容をとらえていたことが明らかになる。

なお、**unfinished business** 概念の展開を追えば、ロスが末期患者以外の人々を対象としていくことによって同概念も拡張し、特に「死別後の課題」、「次世代へ負の連鎖を生む課題」として重視される。このうち「死別後の課題」についてロスの著述から検討すると、彼女の末期患者の臨床経験に基づく理解が、愛する者と死別した後の死の「受容」について論及しないことに影響していた可能性をとらえることができる。

以上を踏まえ、キューブラー＝ロスの思想におけるユングの「個性化」からの影響を検討すれば、「個性化」において見出される、意識が無意識を取り入れていく「意識の発達」と「死の準備」とを、ロスが「死にゆく過程」で遂げられる人々の変容において見ようとしていたことに、その積極的な影響を見出すことができる。

続く第5章では、「死にゆく子ども」の問題を取り上げた。ロスは、シカゴ大学離職前後から「死にゆく子ども」に関わり、その子どもたちに関心を向けていくなかで、ユ

ング派の分析家 S.バッハの研究を参考にし、バッハの手法を用いて子どもたちに自由画を描かせ、それを読み解いただけでなく、バッハが重病の子どもたちの自由画分析から導いた結論を共有した。またロスは、「死にゆく子ども」からの問いに応答することによって、死のイメージを具体化させ、「成長」という思想を背景に人生をとらえていく。

以上の「死にゆく子ども」に関わるロスの思想を整理した上で、前章で検討したユングの「個性化」からの思想的影響について、「死にゆく子ども」の「個性化」という視点から検討を深めた。キューブラー＝ロスは、死が間近に迫った子どもにも「死を前にした課題」である **unfinished business** があるとし、それを成就させていく変容をとらえた。その変容は、前章でみたように「個性化」における「意識の発達」と「死の準備」となる。したがってロスは、ユングが論じなかった、また子どもの「個性化」について検討したユング派の M.フォーダムも論及しなかった、「死にゆく子ども」の「個性化」をとらえようとしたということができる。

第Ⅲ部（第6・7章）は、「私」の死の「受容」、愛する者の死の「受容」について社会的展開という視座から具体例をもとに考察し、キューブラー＝ロスの思想を読み拓いた。

第6章では、ロスのとらえた「死にゆく過程」が、死や不治を連想させる病いに罹患したことによって自分自身の死に直面することであったことに鑑み、日本において執筆・公刊された闘病記を手がかりに、死や不治を連想させる病いと闘病における「私」の死の「受容」と人間形成について論じた。注目したのは、近代の人格形成概念であった「修養」が、戦前の結核の闘病において重視されていたことである。本章では、「修養」という思想が人々に共有されていた時代の結核の闘病と、その思想が衰退した戦後のがんの闘病を取り上げ、それらの比較を試み、さらにキューブラー＝ロスの思想に照らして考察した。

修養思想のあるなかでの結核の闘病では、「修養」の思想が共有されることで、結核患者の療養が支えられていた。しかし「修養」の思想は時代と共に衰退し、闘病においても語られなくなる。そして戦後のがんとの闘病、すなわち「修養」の思想のないなかでの闘病では、病いによる身体変化や、死と向き合いながら生きる営みは「修養」以外の言葉でとらえられるようになる。

「修養」の思想の有無にかかわらず、死や不治を連想させる病いと闘病で見出せるのは、病状の変化、死に対する恐怖のなかで精神的安定を図り、「私」を保とうとする努力の営みである。この営みが「修養」であるとすれば、それは、キューブラー＝ロス

の「死にゆく過程」の理解に基づいて〈死にゆく過程〉の修養〉ということができる。ただし、この営みは、ロスの思想では充分にとらえられていなかった。

本研究で用いた闘病記では、死の「受容」をとらえることができた。重要なのは、死を「受容」したとしても、その後も死の恐怖や病状の変化により心身は揺れ動き、〈死にゆく過程〉の修養〉の営みは続くということである。「死にゆく過程」における人間形成をとらえるには、「受容」後の生の営みに目を向けとらえていく必要があるが、キューブラー＝ロスにおいては、受容した後も最終段階「受容」の枠組みから分岐させないままとらえられていたことになる。

第7章では、愛する者の死の「受容」について取り上げた。キューブラー＝ロスは主宰したワークショップで、愛する者の死の「受容」を分かち合おうとした。しかし、死による他者の喪失、すなわち愛する者の死の「受容」についての思想は十分に展開しなかった。それは彼女が述べた、親を亡くした子どもについても同様であった。

そこで本章では、親を亡くした子ども、いわゆる遺児を支援してきた、あしなが育英会の取り組み、そして同育英会につながるあしなが運動を事例として取り上げ、愛する者の死を「受容」するための分かち合いと社会的展開について論じた。

キューブラー＝ロスは、病い以外の要因による子どもの死という現実から、子どもに起きている問題の解決を図ろうと、子どもを育成するという観点から独自の思想を示した。これと同様に、人間の死や死別が社会における問題と大きく関わる事態においては、その問題の解決が目指される。あしなが運動では、遺児ら当事者による死の「受容」を分かち合う取り組みを重視し、さらに大人へ向けて自立しようとする遺児への支援を中核に置きながら、遺児が遭遇する経済的問題、さらには死別をもたらした社会的問題をも解決しようとしてきた。このようなあしなが運動には、社会的規模での死の「受容」の分かち合いと、その死に関わる問題を解決する必要性の分かち合いをもみることができると。

終章では、日本におけるキューブラー＝ロスの受け止め方と展開について述べ、本研究で論じてきた2つの死の「受容」と人間形成について総括的に考察した。

キューブラー＝ロスは、日本においても終末期医療や死生学のパイオニアとして位置づけられてきた。段階説は「死にゆく過程」を理解する手がかりを与え、またそれを基調として日本における「死にゆく過程」をとらえる研究や、段階説を批判しつつ発展的に読み解く研究などがなされてきた。そして段階説が紹介されて以降、ロスがもたらした死の「受容」という命題は、人々に共有される命題となった。

キューブラー＝ロスが「受容」と異なるものとして当初「断念」を、後に「あきらめ」を示したが、「死にゆく過程の段階」説として述べられたのは「受容」に至るものであり、「あきらめ」へのプロセスは明示されていない。ここにあらわれているように、ロスの段階説は「受容」という肯定的な価値観に傾斜しており、また「受容」に至ることがすべてではないことが示唆される。こうして死の「受容」に固執すれば、「受容」までの道程を漸進的なプロセスとしてとらえ、「受容」することが望ましいとする規範にとられる恐れがある。ロスが死の「受容」という命題を示したが、それはすべての人にとっての命題ではないのである。

しかしながら、人は、死という困難にどうにか対処しようとする。対処するなかで「受容」したいと望むことがある。けれども「私」の死、愛する人の死という危機に直面しているさなかでは「受容」するという意識や目的さえ抱けなくなる。その危機に直面するさなかでは、支えが必要である。家族や医療従事者、専門家の存在、そして実際に危機を生き延びた当事者の声、困難な経験や情動を分かちあえる人が必要とされる。さらに死別後に生じる問題や、死別を生じさせている社会的問題があればその解決の必要性をも広く分かち合い、解決に向けて実際に行動することも求められる。

そして死を「受容」したとしても、生の時間は続く。生は「受容」で終わりではない。人生の「達成」を志す、より豊かに生きようとする、信仰により到達したい境地を目指すなど「受容」した後のプロセスも含めることで、死の「受容」と人間形成をとらえることができる。